

古代ギリシア語から現代ギリシア語への発音の変遷

八木橋 正雄

1 序

古代ギリシア語から現代ギリシア語への発音の変遷の要点をかいつまんで提示しようと思います。母音に関しては *Papilus Oxylinx* や、中世の口語体に近い文献で、その概要が把握できるのですが、子音に関しては、「正書法」で書記されることが多く、正確な音韻が把握できにくいもので、その遷移の時期について確定することがむつかしいのですが、アウトラインを開示したい趣旨で試論として提示します。

2 子音の弱化

印欧基語の有気有声閉鎖音群の消失 /bh/, /dh/, /gh/

ふるえの無い無声有気閉鎖音化 /ph/, /th/, /kh/ (φ, θ, χ)

語尾子音の消失 (例外: ς, ν, ρ)

3人称語尾 /t/ の消失 (例: $\acute{\epsilon}\varphi\epsilon\rho\epsilon$: 但し、 $\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron$ =aliud [latin])

3 ローマ時代のコイナーの特色

ア. 語頭気音の消失

イ. 母音の長／短の無標化. 有強勢では長音化。

ウ. 母音と子音の変遷

4 母音の変遷

前4世紀から：古い二重母音 *ou* /ow/ o/o/（後舌閉母音）の長母音 *ou* が、/o/ 閉長母音となり、次いでコイネーの時代に/u/となる。

前3世紀から：*ei* が/e/と混同して発音され、やがて後4世紀に*i*と混同して用いられる。

後1世紀から：古い二重母音 *oi* /oe/ 及び *υ* が/y/とアッティカ方言で発音される。

(例：*οιειώι* *息子の<YIΩι)

後2世紀から：*ai* が/ae/の二重母音であったものが、逆行同化で/e/と発音される。

後3世紀から：*au*, *eu*（嘗て/aw//ew/）であったものが、わたり音の子音化で/v//f/となる。

ei, *i* の混同：（後3世紀から）/i/：*πέμισις* < *πέμψεις*：*επί* < *επεί*：*είνα* < *ίνα*：
καταμαθίν < *καταμαθείν*：*θέλι* < *θέλει*：*ενπίρος* < *εμπείρος*：*εικθύν* < *ιχθύ'ν*

ω, *ο* の混同：（後3世紀から）/o/：*Ερμόναξ* < *Ερμώναξ*：*ενπίρος* < *εμπείρος*。（音量の無標化）

二重母音の弱化：（母音衝突における半母音化：*συνίζησις*）

-*έα*（2音節）> *συνίζησις*（融音）> 硬口蓋化 > -*ιά* /j a/

（証拠：*Papyli Oxylinx* II-III世紀：*ευδομος*, *ραυδος*, *εμβλευσαντες*, > *έβδομος*, *ράβδος*, *εμβλέψαντες*）

[Cf: LEJEUNE, Michel (1972) *Phonétique historique du mycénien et du grec ancien*; Klinksieck; Paris p.55]

B': コイネーの時代、歯音の*δ*と、喉音*γ*は、摩擦音になっていた。

氣息音の *φ*, *θ*, *χ* は、その氣息性を失いつつあった：例：ラテン語翻字：*Fyllis*, *Filippus*, *Efestina* < *Φυλλίς*, *Φίλιππος*, *Ἐφαιστίωνα*

5 母音の変遷の要約

(1)

本来の音価 = *η* = 長・開 /ε/

移行期 = 長・閉 /ε:/

最終 = /i/

現在の音価になった時期（推定） = 後一世紀

(2)

本来の音価 = $v = /u/$

移行期 = $/y/$

最終 = $/i/$

現在の音価になった時期 (推定) = 後五世紀～十世紀

(3)

本来の音価 = $Ai, Hi, \Omega i$

移行期 = 長 $/a, e, o/$

最終 = $/a, i, o/$

現在の音価になった時期 (推定) = 後一世紀

(4)

本来の音価 = $\epsilon i = /ej/$

移行期 = 長・閉 $/e/$

最終 = $/i/$

現在の音価になった時期 (推定) = 前三～二世紀

(5)

本来の音価 = $ou = /ou/$

移行期 = 長・閉 $/o/$

最終 = $/u/$

現在の音価になった時期 (推定) = 前一世紀

(6)

本来の音価 = $ai = /aj/$

移行期 = $/ae/$

最終 = $/e/$

現在の音価になった時期 (推定) = 後二世紀

(7)

本来の音価 = $oi = /oj/$

移行期 = $/oe/, /y/$

最終 = /i/

現在の音価になった時期（推定） = 後五世紀～十世紀

(8)

本来の音価 = $\alpha\upsilon$ = /au/

移行期 = /ao/

最終 = /av, af/

現在の音価になった時期（推定） = 後一世紀

(9)

本来の音価 = $\epsilon\upsilon$ = /eu/

移行期 = /eo/

最終 = /ev, ef/

(10)

本来の音価 = $\eta\upsilon$ = /eu/

移行期 = /ju/, /jo/

最終 = /ov, of/

年代に関しては、現代ギリシア語の母音組織は（ υ と $\alpha\upsilon$ で示される） /u/ の非円唇化という小さな細部を除いては、紀元の変わり目頃には、その組織が構成/体系化されていたようです。この非円唇化はビザンティン時代に生じたものです。

番号 2、3、4、7 はまとめて、「イオタ化」として知られる重要な現象を形成しています。これは様々な単純母音と二重母音が一つの音価 /i/ に還元される過程で、/i/ は現代ギリシア語の母音組織の特徴をなすものとなります。この現象が既に前七世紀に、 $\epsilon\iota$ がコリント方言で閉母音の /e/ になり、すぐにアッティカでもそれに続いたことによって続行されたようです。そしてほぼ同時に、ボイオティアでは $\epsilon\iota$ はその最終段階の /i/ になっていたようです。他方、ギリシア語世界の様々な地点で、他の変化が既に始まっていました。それらは皆同じ方向に志向していたのです。 η が徐々に新しい音になり閉音化し、最終的に無数の地方的発展と変化の過程が収斂して、その最終的な音価に到達したことを見ることができます。この場合もその音価は /i/ でした。 υ と $\alpha\upsilon$ が中間に共通の /y/ の段階を経て進んでいったのもまた /i/ でした。この音が遅ればせに非円唇化したとき、十

五世紀前に始まったこの過程が完了したようです。言語の表層をとればこの方向への運動はずっと前に廃されたように見えるのですが、実際にはそれは完了したわけではありません。この過程は、ちょうど始まったときと同様に、地方的ですが、まだ続いており、再び共通語に新しい変化をもたらすのを待っているのです。「イオタ化」の最終段階を観察するには現代ギリシア語方言の研究をしなければなりません。それは概略、北方方言と南方方言の二群に分かれます。(トラキア、マケドニア、テッサリア、北部諸島、エペイロスなどの言語を含む)北方方言では当該の現象は極端な形になっています。ここではアクセントのない/e/はすべて(つまり ε も αι も) /i/になっています(これに対応する同様の性格の他の変化も観察できます。アクセントのない/i/と/u/は、数が減ったり除去され、有強勢の/o/は/u/になります)。

6 子音について

正書法上で規範形がそのまま保持され、表層形が反映されていないので、音韻変化がいつ起こったのか同定し難いものです。

語頭の氣息音の消失 (ψίλωσις) (語頭連声)

古典時代からイオニア方言でみられ、現代に継承されている Η の代わりに長音 /ε/ の置換。

καθ' ημέραν < /kath' hémeran/ /kat' hémeran/ /kathméra/
 プトレマイオス朝にも同じく : κατ' εκάστον, κατ' ημών,...

氣息音の同化 : εφέτος < επ' έτος, μεθαύριο < μετ' αύριο

子音連続の簡略化 : πέμψεις > πέμισις (/mps/ > /ms/)

異化 : ιχθύν < ικθύν, χθές > χτές, εδέχθην > δέχτηκα

θ > τ : γενέσθαι > γενέσται

流音と閉鎖音の結合の際の異化・同化 : κόλπος < *κόλφος [It.golfo]; απήλθαν > απήρθαν, ;現代の方言で : αδερφός, δερφι'νι, ορπίδα < ελπίδα, Αρβανίτης < Αλβανίτης,

要約すると、原ギリシア語から現代ギリシア語までの主要な子音変化は次の通りです。

本来の音価/現在の音価/現在の音価が一般的になった時代

(1)

本来の音価 = ディガンマ = /w/

最終 = 消滅 前8世紀

(2)

本来の音価 = 帯気音 = 語頭の H

最終 = 消滅 紀元後数百年

(3)

本来の音価 = β = /b/

最終 = /v/

(4)

本来の音価 = δ = /d/

最終 = 有声の / δ /

(5)

本来の音価 = γ = /g/

最終 = 摩擦音の / γ /

(6)

本来の音価 = ζ = zd (/dz/, /z/)

最終 = /z/ 前300年頃

(7)

本来の音価 = $\varphi = p +$ 帯気

最終 = /f/ 紀元後数百年

(8)

本来の音価 = $\theta = t +$ 帯気

最終 = 無声の/θ/

(9)

本来の音価 = $\chi = /k/ +$ 帯気

最終 = /ç/

現代ギリシア語の子音体系は紀元の前後に完全に成立したようです。二つの体系を比較すると、本来の子音音価には変化したものがあるにせよ、別々の音が一つの音価に統合することはなかったようです。ですから新しい系統は古い系列と同じ音の変異形を持っています。実際、初期のディガンマの消失とそれに続く帯気音の消失は、特別な条件下での/b, d, g/音の保持によって補充されています。

この点で、ギリシア語の子音体系の発達とは異なっています。子音に関しては、母音体系を特徴づけていた単純化・統合の兆候はみられません。子音体系の発達は別の方向に進んで行っています。

(1)は それ全般の傾向から孤立しています。共通語法からのディガンマの消失は、子音発達の中で生じた事ではなく、子音発達を促すそのはじめを構成しています。それは、共通ギリシア語の構造を大まかに決定した過程の最後の段階を特徴づけます。その主な点は、子音よりも、母音体系の領域でもたらされた結果からの間接的影響にあります。

残りの変化は二つの過程を伝えています。1.帯気音の消失、2.閉鎖音の相応する摩擦音への変化。帯気音の消失は上記(2)で、摩擦音への変化は(3)から(6)で表わされ、(7)から(9)では両方が融合しています。

帯気要素への退化が始まったのは早く、原ギリシア語はその印欧基語の複雑な帯気音の系列を簡略化することで子音体系を構築しました。印欧基語の有声

帯気音の全体系は簡素化され、その機能は残った三つの、つまり θ, φ, χ という無声帯気音によって担われたわけです。これらをも除去する過程は歴史時代に持ち越されました。この過程（語中の帯気音の消滅）と語頭の帯気音の消失は関連があったと思われます。両者は同じ傾向であり、明らかに関連性があります。後者の方が先に生じたのですが、それが前者をある程度簡素化したかもしれません。

第二の過程はより不可思議です。これは(3)から(9)までの七つの変化に現われています。実際、三つの帯気閉鎖音 θ, φ, χ は単に帯気を失ったのみならず、相応する摩擦音に発展しました。帯気が、閉鎖音を作るのに必要な障害を除去することでそれに先行していた閉鎖音をまず消失させていったのでしょう。とにかく、閉鎖音が相応する摩擦音に変化し、それぞれの第二の要素である帯気が消滅したという事実が残っています。

(3)から(6)に関しては音韻変異過程はもっと単純です。これら全てにおいて、有声閉鎖音の対応する有声摩擦音への変異があっただけです。

ですから、十個あった本来の閉鎖音のうち、残ったのは三つにすぎません。つまり、 π, τ, κ です。残り七つは現在では全て摩擦音です。 Meillet, *Aperçu d'une histoire de la langue grecque*, -Paris, 1913 (p.22) によると、原ギリシア語の閉鎖音体系の中で π, τ, κ だけが安定した要素を提示しており、残りは最初から調音が弱く、「閉鎖調音を単純には実現しないようになる傾向」によってゆっくりと退化したようです。

ア. 指小辞 $-ιον$

ο の消失と、母音衝突 $-ιο-$ の位置に有強勢

καρβούνιν, κουκίν, κριθάριν, οινάριν, χορτάριν, μισθάριν, μοναστήριν, Αμόνι(ν), διβίκιν

イ. あいまい子音 $\mu\beta, \beta\dots$

εμπουκκώνεται 中の $\mu\pi$;

ウ. 二重子音 $/ts/ /dz/$

τσαγγάρης, πετσωτής, τυρίτσι, κάτση. ; πετσί< pezzo [lat.]

異化 : τσ < θσ ; κάτσε < *κάθσε < κάθισε. ; χτές < χθές

エ. 異化 (ανομοίωση)

χθ > χτ | θ > τ | σθ > στ (現代ギリシア語北西方言に同じ)

εταράχτη < εταράχθη, εχτρούς < εχθρυς.

δεχθόμεν < δεκτούμε,

/fs/ > /ps/

μισεύση > μισέψει, κινδυνεύση > κιντυνέψει

7 現代ギリシア語への移行

νερό < νηρόν, κερι < κηρίον, θεριό < θηρίον, σίδερο < σίδηρος.

(語頭音消失) : μέρα < ημέρα, μάτι < ομμάτιον, ρωτώ < ερωτώ, στον < εις τόν, σαν < ωσάν, που < όπου, δεν < ουδέν,

(語尾音-v の黙音化) (方言では有声)

[例外 : 対格形の場合 : τον προφήτην, την ημέραν, την πόρταν, την στράταν]

現代ギリシア語の移行については、「現代ギリシア語の諸方言について」(プロピレア : vol.16, p.1-3) 「ギリシアの方言」(月刊「言語」2004年7月号 p.60-65) で述べたように、方言にその音韻変異の残渣・変移の足跡が残されています。

古典から現代語への移行の研究については、現代ギリシア語諸方言からのアプローチが適切と思慮します。

8 結び

以上、ギリシア語の音韻変遷のアウトラインを辿ってきました。要部箇所と思われる箇所のみを挙げたにすぎませんが、通時音韻的研究に資することができれば幸いです。

文献

引用語彙例の引用

- Christian August Lobeck, *Phrynichi Eclogae nominum et verborum Atticorum*. Leipzig, 1820
- E.Fischer, *Die Eklogae des Phynichos*. Berlin, 1974
- Moeris, A., *Lexicon Atticum*. Leipzig (Editorum Ioannes Pierson), 1831
- Psichari, Iannis, *Quelque travaux de linguistique de philologie et de littérature helléniques; tome I*, Paris, (Les Belles Lettres) [p.668-699].
- Papyrus Oxyrinx XVI, N°1862.

一般

- Babionitis, Georges, *Συνοπτική ιστορία της ελληνικής γλώσσας*, ΑΘΗΝΑΙ, 1985
- Bakhtin, Nikolas, *Introduction to the Study of Modern Greek*, Cambridge, 1935
- Hadzidakis, Georges, *Μεσαιωνικάί Νέα ελληνικά*, ΑΘΗΝΑΙ, 1907
- Hesseling, D-C. et Pernot, Hubert, *Anthologie néo-hellénique*, Paris, 1925
- Horrocks, Geoffrey C, *Greek : a history of the language and its speakers*, 2nd ed., Chichester, 2010
- Meillet, Antoine, *Aperçu d'une histoire de la langue grecque*, Paris, 1913
- Tonnet, *Histoire du grec moderne*, Paris, 2003
- Vendryes, Joseph, *Traité d'accentuation grecque*, Paris, 1945
- Yagihashi, Masao, *GENDAI GIRISHA GO NO KISO*, Tokyo, 1984